

# J.F.Oberlin (オベリン) の公立学校カリキュラムに関する試論

海津 淳

キーワード：J.F.Oberlin、公立学校、カリキュラム、中等教育、職業教育、自由学芸・人文教育

## 序

J.F.Oberlin (以下オベリンと表記) の教育活動は、主に先駆的な幼児教育の実践と方法、理念、その近代性において知られている。フランス啓蒙思想、モラヴィア兄弟団とコメニウスといった先駆者の継承から、ドイツ敬虔主義教育家および汎愛教育家ら<sup>1</sup> 同時代者との交流、ペスタロッチへの影響まで<sup>2</sup>、すなわち歴史的教育思想の遺産から最も斬新な思想に至るあらゆる方面の知識と教育思想を踏襲して成し遂げた幼児教育領域の業績は、極めて近代かつ普遍的な独創性を有していた。

あるいはまた山間のバン・ドウ・ラ・ロッシュ地区ヴァルデルスバッハ教区担当の牧師として、道路や橋梁工事から農畜産物の改良、医療活動、貸付基金運営、産業誘致まで、教育に加えてオベリンがこの教区のために成し遂げた功績の数々は驚異的ではなかった。

あらゆる領域において教区民の困窮の解消のため生涯にわたり尽力したオベリンであるが、わけても彼が「教育」に力を注いだのは、言うまでもなく「教育」が、時間はかかるにせよ一人の人間の能力を引き出しその知識と技術の獲得によって自立の手段を与え、それがすなわち最も堅固で永続的な貧困解消の手段となるからに他ならない。彼の教育実践を特徴付ける幼児教育の分野は、その精髓の凝縮といえるものである。

しかし本稿では、オベリンが教区児童のために整備したより高学年の児童の学校、教区の *écoles publiques* (公立学校) のカリキュラムをとりあげ、その歴史的・地域的背景に基づいてこれを考察し彼の学校の特質と意義を論ずる試みである。

## 1. オベリンによる公立学校 *écoles publiques* カリキュラム

### 1) バン・ドウ・ラ・ロッシュの公立学校 *écoles publiques*

オベリンは、1767年バン・ドウ・ラ・ロッシュ地区ヴァルデルスバッハ教区に牧師と

して赴任後、ただちに教区児童の教育の必要を痛感し、1770年、フレーベルの幼稚園に先んずること40年<sup>3</sup>、ヨーロッパ最初の幼児教育機関「編み物学校」*écoles à tricoter*、別名ポワル・ア・トリコテ *poèles à tricoter* を創設した。3、4歳から6、7歳の幼児、いわば就学前児童を対象とした教育機関で、教育・学校の制度化すらされていなかった当時のフランスでは、その存在がすでに驚異的であったと言えよう。若い女性を教師として採用し、初等学校でさえ読み・書き・歌唱に時として計算が加わる程度であった当時において、この幼児教育機関ではフランス語、動植物・鉱物の野外観察とスケッチ、地理、礼儀作法や衛生観念など現代の幼児教育と比較しても遜色ない科目と、加えて一種の職業教育としての編み物というこの地方の事情を如実に反映した教科が提供されていた。あるいは、レクリエーションやゲーム的要素の導入など『エミール』<sup>4</sup>にみられるような幼児・児童の発達段階に配慮した教育方法も、広範なオベリンの知的関心と意欲的实践を示すものとして列挙すべき点であろう。

この幼児教育機関がオベリンの教育思想と実践を代表する業績であることは論を待たない。しかし彼は当然ながら次なる段階の学校教育の整備にも着手した。それが、バン・ドゥーラ・ロッシュ、ヴァルデルスバッハ教区の5村に整備した公立学校 *écoles publiques*<sup>5</sup> である。オベリンの教区赴任以前、こうした「学校」は唯一ヴァルデルスバッハ村にのみ存在していた。前任牧師であるシュトゥーバー<sup>6</sup> *Johan Georg Stuber* (1722-1797) は既にこの学校で児童教育に尽力していたのであるが、オベリンはさらに5村すべてに順次1校ずつ公立学校を設置してゆく。

この公立学校はおよそ7歳からの児童を対象とした教育機関であり、オベリンは教区民すべてに16歳までの就学と、学校運営のための一種の教育税を義務付けていた。教区の5村すべてに学校を設置するという言わば「学区制度」も、フランスでこれが法制化するには1833年の「ギゾー法」を待たねばならなかった<sup>7</sup>。オベリンは前述の幼児教育機関「編み物学校」(または「ポワル・ア・トリコテ」とこれら公立学校を同一の建物内に設置し、また「ポワル・ア・トリコテ」の教師と公立学校の教師による研修会・模擬授業を実施するなど、二つの教育機関の連結・一貫化を図っており、ここにも時代に先んじた近代性を見ることができるのであるが、本稿ではこの公立学校のカリキュラム(授業科目)を提示し、これに関する考察をおこなってゆきたい。

## 2) 公立学校のカリキュラム (授業科目)

J.W. カーツはその著作『ジャン・フレデリック・オベリン』巻末にシュトゥーバー/ブルクハルトの報告として、オベリンの公立学校のカリキュラムを記載している<sup>8</sup>。これらを以下訳出する。

オベリンの学校のカリキュラム

### 1. 最年少または初級課程

### [第1学年]

1. 悪習の放棄。
2. 良い習慣の習得—従順、誠実、秩序、善意、善行など。
3. アルファベットの小文字の理解。
4. 本無しでの綴り。
5. 難しい単語とシラブルをうまく発音すること、朗読の際の正しい抑揚。
6. 提示されたものを正しいフランス語で言う。
7. 道徳と宗教の最初の概念。

### [第2学年]

1. 既習の知識の反復と展開。
2. 本の中からの（より難しい単語の）綴り、大文字の習得。
3. 魂の機能の理解。
4. 時と季節の概念。地上の生産物、動物、人間の概念。同様に人間の栄養、衣服、住居の概念の習得。  
職業と賃金、財産、寄付、両替、遺産、貨幣、買い入れ、借金、負債、利子の概念。  
家族、村落、市の立つ町、都市の概念。裁判と訴訟、行政長官、国家、公共福祉の概念。近隣・遠隔の国々と人々、自然の推移、神の力、恵み、知恵の概念。  
魂の不死、徳と悪徳、良心の喚起と神への従順、及びイエスキリストの手本に倣うことによる救済への道の概念の習得。
5. 1000までを、順序どおり・逆に数えること、100までの足し算、引き算のために算数の本を使用すること。

### [第3学年]

1. 既習の概念の復習と前出の練習の反復。
2. 説明され既によく知っている本を流暢に読むことを学ぶ。
3. 小文字をきちんと読みやすく均一に（対称に）書く。
4. 10までの数を様々な組み合わせで縦横に書く。
5. 石板上での抽象的数量の足し算、引き算、掛け算、引き算。

## 2. 中級課程

### [第4学年]

1. 既習の概念の復習と前出の練習の反復。
2. 読みの練習。
3. 地理的要素の説明、すなわち概念の同定—島、海峡、岬、海港など。城砦、城、通行料について、政治体制、言語、宗教における相違を語る。

4. テキスト無しでの地図の説明。
5. 数学の第2教程－抽象的数量の分数から三数法まで。
6. 第2級の習字（ペンマンシップ）。
7. ドイツ文字の学習。
8. 楽譜に従った歌唱。

#### 〔第5学年〕

1. 復習。
2. 読み書きの実践。
3. 印刷物と筆写本の読み。
4. 歌唱。

#### 〔第6学年〕

1. 復習。
2. 実用的数量による計算の四則の明示。
3. テキストを伴った地形図の学習。
4. 綴り無しのドイツ語の読み。
5. 歌唱の継続。

### 3. 大人のための課程<sup>9</sup>

#### 〔第7学年〕

1. 前学年の練習の復習。
2. 自然史、特に植物学。
3. 約束手形、領収書、計算書等の書き方の学習。
4. 歌唱の継続。

#### 〔第8学年〕

1. 上述のとおり、復習。
2. 三数法までの応用数学。
3. さらに詳細な地理学。
4. 世界史上の最も重要な事件。
5. ドイツ語からフランス語への訳（口頭）。
6. 歌唱の継続。

#### 〔第9学年〕

1. 復習。

2. 農業、登録（登記）に関する事項の基本、および健康規則の基本。
3. 幾何学、物理学、天文学の基礎。
4. フランス文字によるフランス語からドイツ語への翻訳（筆記）。
5. 労働者のための書簡、領収書、計算書の作成。
6. 宗教とそのエヴィデンス。
7. 自然科学および人文科学の一般的概念。
8. 歌唱。
9. 羽ペンの削り方。

## 2. カリキュラムの特質

### 1) 職業教育的特質と自由学芸・人文教育的（あるいは百科全書的）特質

以上、オベリンの教区における公立学校のカリキュラムの記録を引用したが、これらはどのような特徴を有しているのか。

まず第一に目を惹くのは、このカリキュラムにおける職業教育的要素であろう。第7学年に至るまでの6年間は読み・書き、計算、社会、宗教、歌唱といった基礎的科目を段階的に発展させてゆく課程であるが、第7学年および最終学年においては、「約束手形、領収書、計算書等の書き方の練習」「農業、登録（登記）に関する事項の基本」「労働者のための書簡、領収書、計算書の作成」という極めて具体的・実践的な技能の教授が行われている。ことに第7学年でははっきりと「労働者のための」<sup>10</sup>と記されている通り、これらの科目は「職業教育」科目として定義して間違いはあるまい。

「農業、登録（登記）」という科目は、基幹産業が農業であるこの地方で効率的に適正に生業を営むために必要な農業技術と土地管理の知識であり、第7学年で練習を始め第9学年で実際の書類の作成を学ぶ諸々の契約書類は、日常生活における約束事から雇用契約、「約束手形」等さらに高度な商取引を想定した科目といえよう。

第二に注目すべきは、これらとは全く正反対とも言える自由学芸的要素、言い換えれば人文教育・教養教育課程的要素である。第7学年から始まる「自然史」、第8学年における「さらに詳細な地理学」「世界史上の最も重要な事件」、そして最終の第9学年においては「幾何学、物理学、天文学の基礎」「自然科学および人文科学の一般概念」という科目が提供されている。ただしここでの「人文教育・教養教育課程」の語は近代的な意味における人文科学ではなく、中世より継承されるヨーロッパ教育史の「人文学」*studia humanitatis* 及びそこから発展した大学における伝統的「教養教育課程」を包括した「自由学芸」的要素として定義した。

この提起については、オベリン自身の大学における修得教科を一顧する必要がある。1756年9月29日、15歳のオベリンはプロテスタントのギムナジウムを終了する

とストラズブル大学の学生となる。敬虔主義者ロレンツ Sigismond Frédéric Lorenz (1727-1783)<sup>11</sup> に感化を受けいづれ神学の道に進む意志はあったにせよ、彼の好奇心・知的関心は幅広く、多様な領域に及んだ。

オベリンが 1820 年にナンシーの神学生たちに語ったところによれば、学生時代に彼は以下のような科目を履修している。

「齢 80 歳になんなんとする私の言い忘れを除けば、私が勉強したのは次の通りです。ギリシア語、ヘブル語、論理学、修辞学、形而上学、算術、幾何学、三角法、天文学、古代および近代地理学、自然史すなわち動物界・植物界、鉱物界の三界に分けられた地上のすべての被造物の勉強、哲学史あるいは古代と近代の主要な哲学の体系、自然法、エジプト、ギリシア、ローマ、ヘブライの古代史。

教義学、聖書釈義、教会史とそれに付随する地理学、異なる教会の教理の研究または聖書の教理との比較における聖体拝領、牧会研究、毎日の聖書研究。」<sup>12</sup>

オベリンは 1763 年、哲学博士号を取得し<sup>13</sup>、前年 1762 年から 1765 年をストラズブルの医師ツィーゲンハーゲン Daniel Gottlieb Ziegenhagen (1706-1771) 宅の家庭教師として過ごした。その後再び大学で神学を修め牧師となるのであったが、上記の履修教科には、専門課程の神学分野以外に極めて広範な領域を修得していることが見て取れるであろう。彼の旺盛な知識欲はその後、バン・ドゥ・ラ・ロッシュでの教師養成から植物標本作製、農畜産物・土壌の改良まで余すところなく教区の生活改善のために応用されてゆくのであるが、それはさておき、続いてその修得教科と彼の公立学校のカリキュラムを比較しよう。

先に見たとおり教区の公立学校の上級クラスでは、以下のような教養科目的な教科が設置されている。第 7 学年の「自然史、特に植物学」、第 8 学年の「三角法までの応用数学」「さらに詳細な地理学」「世界史上の最も重要な事件」、第 9 学年の「幾何学、物理学、人文学の基礎」「自然科学および人文科学の一般概念」である。大学でのオベリンの履修領域との対照は次の通りである。

第 7 学年：「自然史、特に植物学」－「自然史」（オベリンの履修科目。以下同様）

第 8 学年：「三数法までの応用数学」－「算術」「三角法」

第 9 学年：「幾何学、物理学、天文学の基礎」－「幾何学」「天文学」

「自然科学および人文科学の一般概念」－オベリンの履修科目を包括

以上、両者の関連性は一見して明らかである。オベリン自身が 15 歳で大学に入学するが（当時の一般的な年齢である）、教区の公立学校の第 7 学年から第 9 学年までの年齢を算出すれば、およそ 14 歳から 16 歳ほどの年齢層となる。時代的・地域的狀況を考えれば、バン・ドゥ・ラ・ロッシュの子供たちが大学に進学する可能性は極めて低い。しかし、オベリンの考案したカリキュラムからは大学の教養課程を想起させずにはおかない科目領域が見て取れるのである。

シャルメルはオベリン自身が大学で受けた教育について、その著書の中で「百科全書的」「実用的」とも述べている<sup>14</sup>。オベリンの生きたこの「啓蒙思想の時代」とその多大な影響を考えれば、確かに「百科全書的」科目領域とも定義すべきであろう。しかし、「学校教育のカリキュラム」という視点から見れば、その大学の教養科目的性格との一致から「自由学芸・人文教育的要素」と定義することが許されよう。

## 2) その他基礎知識的教科にみる特質

先の引用に見る通り、彼の作成したカリキュラムでは、上級クラスすなわち高学年において特殊性が際立っている。しかしその他指摘すべき点として、基礎知識的教科に言及すべきであろう。

### フランス語

まずはフランス語教育に関して、これが全教程において継続的・段階的に実施されている点を挙げねばならないであろう。「フランス語」は幼児教育機関「ポワル・ア・トリコテ」の段階からその筆頭教科として教えられているが、これはバン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方がアルザスの山間に位置し言語的にも強度の方言によって周辺地域から孤立してきた特殊な事情に起因しており、前任者シュトゥーパーもこの点には心を砕き、自ら教区の学校のためのフランス語教本 *Alphabet méthodique pour faciliter l'art d'épeler et de lire en français* (1762) を出版している。

これをさらにオベリンは公立学校において極めて組織的に、つまり児童の習得能力に基づいて段階を追ってカリキュラムを構築しているのである。第1学年の「アルファベット小文字の理解」に始まり、難易度に沿った単語の綴りの習得、また正しい発音、朗読の際の抑揚の訓練、さらに第5学年に至ると「読み書きの実践」と実用性を視野に入れた教科を見出すことができる。同時代アンシアン・レジーム期の学校の実態をみると、当時「小さな学校」*petites écoles* と呼ばれた一般的民衆レベルの初等教育機関では、せいぜい反復と暗記による「読み」の授業、恵まれた場合で「書き」が加わるに過ぎず、それも実用とはほど遠い「ラテン語」を用いていたという<sup>15</sup>。初等教育段階で真剣に「フランス語」を教授したのは、ラ・サール Jean Baptiste de la Salle (1651-1719) 創設のキリスト教教育修士会 *Frères des écoles chrétiennes* による学校を僅かな代表例とするに過ぎない<sup>16</sup>。

### 算数

算数に関しても、ほぼ同様のことが言えよう。第2学年の「1000までを、順序通り・逆に数えること、100までの足し算・引き算のために算数の本を使用すること」から四則計算、さらに分数、三数法と進んで第6学年で「実用的数量による計算の四則の明示」に到達する。「実用的数量による計算」とは何かとえば、これはいわゆる応用問題、文章題と考えられる。何故ならばオベリンは成人のための学級においては、より理解を深めるために文章による応用問題を推奨しているからである<sup>17</sup>。このように彼のカリキュラムでは算数の基本的知識をまんべんなく網羅していることが見て取れるのである。

## ドイツ語

さらには加えて中級課程からドイツ語の授業が導入されるが、これアルザスという地域の理由、すなわちフランス・ドイツの国境地帯でありアルザス内部においてもドイツ系住民とフランス系住民が混在する事情に起因していることは言うまでもない。

## 宗教および歌唱

その他、宗教—無論キリスト教であるが—に関してこのカリキュラムでは、それほど多くの記載がない。第1学年の「道徳と宗教の最初概念」、第2学年における「魂の機能の理解」以降は最終学年における「宗教とそのエヴィデンス」のみである。宗教家たるオベリンの学校としては意外であるが、カーツの著作には「ヴァルデルスバッハ教区の学校における時間割」が掲載されているので、これも含めて検討してみたい。この時間割では週6日各日4時間授業のうち1時間を「教理問答」もう1時間を「宗教教育」に充てている<sup>18</sup>。この時間割には「ドイツ語単語書きとり」の授業が含まれており、その点からすれば間違いなく第4学年以降の中級課程における時間割であろうが、先のカリキュラム中、中級課程には宗教に関する科目の記載がない。ここから、オベリンにとって宗教に関する授業を実施することは、改めてカリキュラムに記載するまでもないほど当然のものであるがための欠落と推測できるのであるが、しかしこの点に関してはまた稿を改めて検証することとしたい。

なお第4学年から第8学年までの「歌唱」については、宗教と関連する科目として当時の「学校」で典礼用聖歌が採用されることは伝統的にごく一般的であった。すなわち学校で教えられる「歌唱」は中世初期の修道院付属学校の時代からの継承であり、宗教科目の一環であったことを付記しておきたい。ただし彼のカリキュラムに見るような「楽譜」を使った勉強は、少なくとも民衆レベルの初等教育では教えられておらず、特筆に値するものである。

## 地理

またオベリンのカリキュラムでしばしば取り上げられる領域としては「地理」が挙げられる。中級課程第4学年と第6学年における「地理的要素の説明、すなわち概念の同定—島、海峡、岬、海港など」「テキストを伴った地形図の学習」および第8学年の「さらに詳細な地理学」である。彼の教育実践中、その教材の独創性は顕著なものがあるが、そのひとつに「白地図」がある。周知の輪郭線程度の地図に都市名や地形を書き加える教材であるが、オベリンは低学年児童からこの教材を使用し、身近な村からアルザス、フランス、ヨーロッパへと学習をを拡大しているように、あるいは「ポワル・ア・トリコテ」の教科にも地理が含まれているように、「地理」という教科の重視はその教育に一貫して見られる特徴でもある。

## 社会

そして最後に社会に関する科目であるが、現代の学校教育においてはごく当たり前で教えられる「社会科」に該当する内容が、無論オベリンの時代に当たり前の授業科目だったわけではない。この点に関してはおそらく、『大教授学』*Didactica Magna* に見る



通り「すべての人にすべてのことを」を教育理念としていたコメニウス Johannes Amos Comenius (1592-1670) の影響を指摘することができよう<sup>19</sup>。あるいはより実際的な理由として、狭隘な山間の村に生涯を送る両親たちに代わって、オベリン自身が児童に「社会」=「人間世界」についての知識を教える義務を痛感していたのかもしれない。

### 3) オベリンの公立学校カリキュラムの特質に関する考察

以上、これまでオベリンによる公立学校カリキュラムについて検証してきたが、その特質について次のような結論を導き出すことができる。

彼がヴァルデルスバッハ教区の5村に各1校ずつ整備してきた公立学校は、対象年齢を6、7歳から16歳までと想定した教育機関である。フランスで教育制度が確立するのがフランス革命以降、それも漸次的に19世紀までの長い時間を要した末のことである。当然彼の時代に就学年齢に関する制度的規定はなかったが、仮に現代的な常識を適用すれば、6、7歳から16歳までのこの学校は、初等教育と中等教育を一貫させた教育機関と言ってもよい。

先に言及した「職業教育的特質」と「自由学芸・人文教育的（あるいは百科全書的）特質」がオベリンの公立学校カリキュラムに現れるのは、ほぼその上級課程（第6学年から第9学年まで）においてであり、それ以前の課程においては（当時の一般的な初等教育と比較にならない充実を見せているとは言え）いわゆる「読み・書き・計算」を核とする初等教育的教科が採用されている。ここから言えるのは、オベリンは初等教育に該当する年齢においては基本的な知識を教授し、中等教育に該当する年齢層には職業的知識と自由学芸的知識相方を提供していると言うことである。彼が16歳までの就学を義務化したことから逆算すれば、おおよそ前者は7、8歳から12、13歳まで、後者は13、14歳から16歳までと想定することができる。

現代からみれば極めて妥当な構想に基づいたカリキュラムであるが、フランス革命を挟んだこの時代に、既にこうした組織的なカリキュラムを構築していたオベリンの先見性には驚くばかりである。あるいはまた、教区の貧困解消を自らの責務と任じた彼の諸々の活動と、「教育」をその最も有効な手段と位置付けていた固有の事情を振り返るとき、このカリキュラムもまたそうした彼の理念の一つの表出であることに思い至るのである。

## 3. 職業教育および自由学芸教育概観

### 1) 職業教育

ヨーロッパに限らず職業教育に関してはその発生を知ることは至難の業であるが、殊にその学校教育の枠組みの中での実施が一般的な知識教育より遅い段階であろうことは容易に想像できる。特にヨーロッパにおける中世以来の同業組合の制度は、技術の伝達をもそ

の範疇に収め「学校」における職業教育をある意味阻んできたとも言えるであろう。しかし現代においては、フランスやドイツで中等教育における職業学校（職業高校）が設置されていることが知られている。そこで、オベリンの時代のフランスとドイツにおける職業教育の様相をここで概観しておきたい。

## フランス

オベリンの生きた時代を大まかに定義すれば、同業組合・徒弟制度の解体期から、未だ産業革命が本格化する前の中間期と言えよう。そうした時代、マニファクチュアという工業形態に対応するため、ある種の職業学校—技術学校が開設されてゆく<sup>20</sup>。代表的なものには1766年パリに開設された王立無償製図学校（Ecole royale gratuite de dessin）をはじめとする多様なレベルの製図学校であり、革命前に27校が存在していた。授業科目に関しては、例えばこの王立無償製図学校では、「実際的な幾何学」「建築術」「製図の領域の基礎的な諸原理」等が教授されており、その目的は「それぞれの労働者が将来自ら様々な制作物を作る能力を獲得するため」（1767年10月20日付の王の特許状）、対象は「職人の仕事に携わっているか、または将来携わるつもりの方」で、受け入れ人数は1500名であった。

その他の例を見てみよう。1768年にロシュフーコー・リアンクール公 le Duc de La Rochefoucauld-Liancourt（1747-1827）によって創設されたリアンクールの学校 Ecole de Liancourt は、傷病兵・退役兵あるいは戦争で父を失った孤児のための学校で、「読み」「書き」「計算」に加えて「軍務にとって有用な手職」が教えられた。この学校はその後、1775年同様の教育を実施していたポパンクール戦争孤児学校を併合して、1803年、フランスで最も伝統ある工芸学校 Ecole d'arts et métiers として名を馳せることとなった。

あるいはより高度な技術習得のための教育機関として、土木学校 Ecole des Ponts et Chaussées（1747）、メジエール兵学校（1748）、造船学校 Ecole d'application du génie maritime（1765）、砲術学校 Ecole d'artillerie（1779）などが18世紀後半に相次いで設立されてゆく。

しかしオベリンの教育理念により近い職業教育としては、ラ・サール Jean Baptiste de la Salle（1651-1718）のキリスト教学校修士会 Frères des Ecoles chrétiennes の初等学校、特にパリ、サン・シュルピスおよびルーアン近郊サン・ヨンの学校を挙げねばならないであろう。ラ・サールも貧窮者の子供のために無償の初等学校をフランス全土に展開し、教師・授業内容ともに良く組織され質も高かったことで知られているが、上記の2校では、一種の技術教育科目が併設されており、例えばサン・シュルピスでは学校にメリヤス工房が設置されていた<sup>21</sup>。こうしたラ・サールの学校に関しては、職業教育の教科全体における位置付け・学校運営の目的を考えれば、むしろオベリンの幼児教育機関「ポワル・ア・トリコテ」に最も近い存在である<sup>22</sup>。

## ドイツ

さて他方、ほぼ同時代のドイツの職業教育はいかなる状況にあったのか<sup>23</sup>。ここでは啓

蒙専制君主フリードリヒ大王と後の教育改革で名高いプロイセンを例に取るが、当地でも絶対主義と重商・富国強兵主義の影響から従来の手工業者組合の変容とその枠内での徒弟制的職業（技術教育）の退潮が現れ始めていた<sup>24</sup>。

そうした事情を背景として、ドイツには「実科学学校」が登場する。その嚆矢は1749年ヘッカー Johann Julius Hecker (1707-1768) によってベルリンに設立された「経済・数学実科学学校」Ökonomische-mathematische Realschule である。この学校が目的としたのは「将来大学へ行く者以外で文筆、商業、農業、技芸、工場制手工業、専門職などによって生活する者に、後々の実務に、たとえ完全でなくても、計画的な授業によって準備されなければならない生徒を入学させる<sup>25</sup>」（ヘッカー）ことであり、学生数は400人（1756年）と大規模なものであった。授業科目は選択制で、「宗教」「ラテン語」「ドイツ語」「手紙書き方」「ギリシア語」「算術」「数学」「歴史」「地理」「測量」「建築」「工場制手工業」「植物」「解剖」「物理」「機械」「鉱物」「鉱山」「経済」「商業」「商業簿記」が準備されていた。同種の実科学学校としてもう一例、ブラウンシュヴァイクのヴァイゼンハウゼ実科学学校の1754年の規定には、「読み方」「書き方」「計算」「キリスト教」「作図」「地理」「歴史」「ラテン語」「フランス語」「数学」「経済」「手紙の書き方」の教科を見出すことができる<sup>26</sup>。

上記の例からもわかるように、オベリンの公立学校上級課程のカリキュラム諸教科には、むしろこのドイツの実科学学校との類似性を発見することができるであろう。ヘッカーの実科学学校においては、「宗教・ラテン語・ドイツ語・算数・地理・歴史」など基礎的教科を並行させつつ、「測量」「解剖」「経済」「商業簿記」など将来の多種多様な職業が想定され、それらを準備するための幅広い領域の教科が提示されている。また、入学する生徒についても、ある特定の職業に就くための技術の習得すなわち先のフランスの「製図学校」に求められるような「現在職人であるかまたは将来その職に携わる者」を対象と規定するのではなく、提供された教科の中から選択が可能であり、先述の彼自身の言葉どおり対象は「将来大学へ行く者」を除いた「文筆、商業、農業、技芸、工場制手工業、専門職」によって生活する者を想定し、計画的な授業によって「後々の実務に備える」ことを目的としている。オベリンの上級課程の教科中で実際の職業を想起させるものは、「農業・登記に関する基本」という農業関連と「約束手形、領収書、計算書等の書き方」などの商業関連科目の2種のみであるが、ベルリンという大都会のヘッカーの学校とバン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方の規模の違いを考えれば、この差は無理なからぬことであろう。

以上、ほぼ同時代の職業教育の状況の概観をみたが、続いて上級課程に見られるもう一つの要素、自由学芸に関しても簡単にまとめておきたい。

## 2) 自由学芸教育（人文教育）

いうまでもなくヨーロッパにおける自由学芸 *ars liberales* の歴史は長く、古くは古典古代に遡る。この異教世界に起源を持つ学問が、西ローマ帝国の崩壊後、ゲルマン人支配下で成立したヨーロッパ世界に継承され、中世において成立した高等教育機関「大学」

universitas の教養課程を担う基幹として長きにわたって最重要な学問領域の一つとしての地位を維持してきた<sup>27</sup>。無論、オベリンのバン・ドウ・ラ・ロッシュの寒村の学校のカリキュラムには、「天文学」「幾何学」などの僅かな例を除いて自由学芸を構成する七科、文法学、修辞学、論理学、音楽、数学、幾何学、天文学が揃ってなどいない。しかし古来からの七科そのものではないにせよ、先に検証したように彼の大学時代に神学以外の学科として修得した諸教科とバン・ドウ・ラ・ロッシュの学校の教科の一致や「人文科学・自然科学の基礎」という構想に、「教養教育」的性格も重ねた「自由学芸的」な要素を仮定することは許されよう。

さて中世の大学における自由学芸七科はまさに教養課程そのものであったが、実はこの教養課程の教科・教程は、歴史の流れの中で次第に大学準備のための教育機関にも浸透してゆくのである。

その代表として挙げることができるのがフランスでも大きな勢力となったイエズス会のコレージュ「学院」－collège であろう。カトリック対抗宗教改革の一翼を担うこの非常に組織化された修道会は、教育においても目覚ましい成果を上げていったのであるが、イエズス会のコレージュでは、本来大学の教養課程に位置していた自由学芸的教育すなわち人文教育をその教程の柱としていた。その構造は次のとおりである<sup>28</sup>。コレージュは上級と下級の2段階に分かれ、下級は10歳から14歳くらいまでに入学し、3年間の「文法級」（ラテン語文法、ギリシア語文法）、第4年次の「人文級」（ラテン語詩、ギリシア語詩）、続く2年間の「修辞級」（古典作品の修辞学的研究）によって構成される。続く上級は3年間の「哲学級」（論理学、形而上学、倫理学、心理学、数学、物理学）、さらに4年間の「神学級」（スコラ神学）<sup>29</sup>が教育課程を構築した。4年間の神学級を除けばまさに大学の教養課程そのものがカリキュラム化されているのは明白である。この教育機関で「ラテン語」と「古典」を徹底して教え込み、それが新しく台頭した上流市民階層の官僚への登竜門としての機能果たして、このイエズス会のコレージュの隆盛を導いたのである。

他方ドイツにおいては「ギムナジウム」Gymnasium と呼ばれる中等教育機関が、大学予備教育機関として存在していた。先に引用した『世界教育史大系 24 中等教育史 I』では「ギムナジウム」について、当時の大学予備門的教育機関の中では最も本格的なものであり、フランスのコレージュやイギリスのグラマ・スクールなどに匹敵し得るものであった旨述べられている。その代表格が、当のオベリンも大学入学前に在籍したストラスブールのギムナジウムである。同書ではこのストラスブールのギムナジウムの成立過程について次のように記している<sup>30</sup>。

ストラスブールのギムナジウムは1538年に発足した。1523年に聖トマス教会のカピトがルター派に転向したのを機に、市政府は教会・修道院の摂取に乗り出し、学校に関しても修道院付属の3校のラテン語学校、その他教会・修道院付属のコレギウムと呼ばれるやや高度な教育機関を統合し、ギムナジウムを発足させた。その学校計画では生徒は5、6歳で最下級に入学し9年間の就学の後、希望者はさらに5年間自由選択の授業を受講す

るという、まさに初等教育から大学までを包含すると言い得るものであった。

また池端監修の『世界教育史』に記載されたストラスブールのギムナジウムのカリキュラムは以下の教科から成っている<sup>31</sup>。

ラテン語：初歩からキケロ、ウェルギリウス、カトー。

ギリシア語：5年目から。福音書朗読から教理問答、イソクラテス、デモステネス等

キリスト教：ドイツ語教理問答、日曜日の福音書朗読、ルター、アンドレーエの教理

問答（ラテン語、ギリシア語）、パウロ書簡

修辞学、弁証法：8年目から

その他、歌唱

以上がギムナジウムという比較的新しい（16世紀）大学予備教育機関のあらましであるが、上記に引用したように、最終3学年においては修辞学、弁証法という自由学芸科目が導入されている点に気が付くのである。従ってここでもコレージュ同様に上級クラスにおいては大学の教養課程に相当する教科が設置されていることが指摘できよう。

ここから、オペリンの時代において、コレージュとギムナジウムという一方はフランスにおいて隆盛を見、他方はドイツの主流教育機関となってゆく2つの大学予備教育機関が、その上級クラスにおいて既に大学の教養課程すなわち「自由学芸」的科目を（あるいはその一部を）採用しているという状況を検証できるのである。

## 考察および結語

本稿は、バン・ドゥ・ラ・ロッシュ地方ヴァルデルスバッハ教区というアルザスの山間の孤立した寒村で、J.F. オペリンが実施した公立学校カリキュラムの特質についての一つの見解を導き出すことを目的とした試論である。

繰り返しになるが、オペリンはその公立学校カリキュラムにおいて、6年間の初級・中級課程までは基礎的知識を提供し、最終3年間で2つの要素すなわち職業教育的要素と自由学芸・人文教育的（または百科全書的）要素を有する2種の科目群を提供している。換言すればこのカリキュラムは最初の6年間で初等教育、最終の3年間で次なる段階に向けての中等教育として構成されていると解釈できよう。現代的にはごく妥当な構想と言えようが、先にも述べたとおり国家的教育制度も未整備な時代の山間の貧困な地域において、こうしたカリキュラムが考案・実施されたことに先ずは驚きを感じずにはいられない。

しかし他方で、より広範な地域での教育機関の状況・変遷を照合すると、彼の構想と同時代の共通点と独自性もまた浮上してくるのである。第一にオペリンの公立学校上級課程の職業教育的要素は、職人の技術向上のための科目ではない点において、フランスの「製図学校」とは異なる。慈善を旨とし貧困解消のために職業訓練の教科を実践した点は、ラ・サールの初等学校と志を同じくするものであるが、オペリンの公立学校でカリキュラ

ムは当座の貧困解消というよりむしろ将来的—学業終了後のごく近い将来であるが—な可能性の選択、そのための準備を主眼としたものではなかろうか。してみるとヘッカーの設立したベルリンの実科学校のカリキュラムが「後々の実務に備える」ために多様な科目を設置している点において最もオベリンの公立学校と近似する理念に基づいて運営された教育機関であるということができるとはあるまいか。実はヘッカーは、この実科学校創設以前は、ハレにおいてギムナジウム、ペダゴギウム、貧民学校、孤児院、などを包括するフランケ財団学園で教師を務めていた。そしてこのフランケ August Hermann Francke (1663-1727) は言うまでもなく敬虔主義者として知られており、その敬虔主義的思想に基づいて築き上げたのがフランケ財団学園であった。オベリン自身敬虔主義的な信仰を持ち、教育に関しても実際 1778 年にドイツの敬虔主義教育家たちを訪問しているのである。無論彼が訪問したのはフランケ自身ではなくその弟子たちであったが、いずれにせよそうしたオベリン自身の教育的関心からも、このオベリンとドイツ敬虔主義教育者の関係と影響という重要な主題については、稿を改めて詳細に検討したく思う。

そしてオベリンがその公立学校においても一つの要素、自由学芸・人文教育的言い換えれば教養教育課程的教科も導入していることは、これまで見てきたとおり明らかである。この点については、どのような解釈を導き出すべきであろうか。極めて単純な図式を用いれば、イエズス会のコレージュにおいてもドイツのギムナジウムにおいても上級段階において、従来は大学の教養課程であるべき自由学芸科目を取り入れた。オベリンは自らの公立学校においてもこれら同時代の主流であった教育機関と同様に、自由学芸・人文教育的要素を持つ科目—「幾何学」「天文学」「人文科学の基礎」「自然科学の基礎」等—を上級段階において導入することを試みたのであろうか。

イエズス会のコレージュもドイツのギムナジウムも一義的には大学予備的教育機関である。大学入学準備のための学校ということが大前提となるが、オベリンの教区の村では大学進学の可能性があったであろうか。いかにオベリンが教育を貧困解消の手段としてその普及・実施に尽力したにしても、時代的にも村の経済的状况から考えてもおそらく可能性は極めて低い。それでもオベリンは、この公立学校を運営することによって教区の児童の大学進学の可能性を想定したのであろうか。否であろう。なんとすれば、大学進学にはラテン語の習得が絶対不可欠だからである。然るにオベリンの公立学校のカリキュラムにはラテン語に関する教科は皆無である。

オベリンがこのカリキュラムによって、教区児童の将来の可能性のために職業教育と大学予備的教育を準備したと結論付けたいが、おそらくそうではない。周辺状況を客観的に考察すれば、公立学校の上級課程における主眼は職業教育であろう。そうなるとこの段階のもう一方の要素自由学芸の科目は何を目的として設置されたのか。そう考えると、改めて「自由学芸」や「教養教育」の意義に思い至るのである。先に述べたようにシャルメルは、オベリンが学生時代に修得した専門外の広範な知識を「百科全書的」と称したが、「自由学芸」「人文教育」「教養教育」「百科全書的知識」の意義・役割とは「世界を知ること」

ではなかろうか。オベリンは教材としても膨大で多様なコレクションを残している。それは動物の骨から光学機器、遠方より渡来品であろう東洋の文物、楽器、実験用具等々である。彼がアルザス山間の村の児童のために作成した教材にも、彼らが一生目にするのではないであろう世界の動植物が描かれている<sup>32</sup>。そしてそこには、彼が最も影響を受けた教育思想家、『世界図絵』によって森羅万象と人間世界全般を児童に提示したコメニウスの教育理念「すべての人にすべてのことを」にも通暁する思想を見出すことができまいか。

ゆえに、オベリンの公立学校カリキュラムでは、その上級課程すなわち中等教育に当たる14歳から16歳の期間を生徒が成人として自立するための最終的な準備段階と位置付け、そこでは彼らの将来の職業にふさわしい実務的知識を提供する。と同時に、自由学芸・人文教育的な教科によって「世界を知る」というすべての人間に不可欠な教養あるいは学究的姿勢をも教授していると言えるのではないだろうか。そしてその「自由学芸」は、彼の時代において「百科全書的知識」という新しい装いを纏ったのである。

## 注

- 1 オベリンの弟子 J. F. Simon は汎愛学舎教師となり、オベリン自身はドイツ敬虔主義教育者の学校を視察旅行に行くなど交流を持っている。
- 2 ペスタロッチとオベリンの直接の面識はなかったが書簡のやり取りを行っている。
- 3 フレーベル Friedrich Wilhelm August Fröbel (1782-1852) はドイツの教育家。ペスタロッチに学びスイスで教育活動に従事した後、1840年ブランケンブルクに幼稚園を設立し幼稚園普及運動に尽力した。一般にこれを世界初の幼稚園としている。
- 4 J. J. ルソー著『エミール』*Emile ou de l'éducation*, 1762.  
Kurz, J. W., *John Frederic Oberlin*, Colorado, 1976. (邦訳ジョン・W・カーツ／柳原鐵太郎訳『ジャン＝フレデリック・オベリン＝アルザスの土を耕し心を育んだ生涯』桜美林学園、2006年) p.81. オベリンは公立学校の教師たちにこの本を回覧して読ませ、彼自身も、いくつかの批判はあるが極めて優れた本であると記している。
- 5 école publique の訳語については、現代的な「私立学校」と対比的な「公立学校」との意味上の混乱を避けるために「公共学校」の訳語を採用する可能性もあるが、ここでは「村」「教区」による運営であることに鑑み「公立学校」という訳語で統一する。
- 6 シュトゥーパー (1722-1797) は、自らの後任としてオベリンに教区赴任を依頼する。彼自身もヴァルデルスバッハの学校のためのフランス語テキストを執筆し、オベリンの赴任後も教区の教育・学校に関してしばしば助言を与えている。シュトゥーパー自身については次の文献を参照。  
Baum, J. W., *Johan Georg STUBER*, Strasbourg, 1998.
- 7 フランス革命後、七月王政下で発布された「ギゾー法」すなわち「1833年6月28日初等教育法」中、第9条では、すべての市町村が単独あるいは隣接する市町村と連合して最低1校の尋常小学校 école primaire élémentaire を運営すべきこと、第10条では県庁所在地または人口6000人を超える市では、前条に加え高等小学校 école primaire supérieure を設置すべきこと等が制定された。
- 8 Ibid., pp.291-293.
- 9 「大人のための課程」の表現についてはカーツも指摘している通り、オベリンが別に実施した成人のための学級を指すのではなく14歳から16歳までの生徒と解釈するのが妥当であろう。
- 10 Ibid., p.293.

- 11 ロレンツはストラスブールの敬虔主義者、説教家。市当局や有力者は正統的ルター派の立場から、敬虔主義者を排斥した。しかしながらオベリンとその両親は実践を重んじるこの新しい宗教的思潮に傾倒し、オベリン自身もロレンツの説教を聞いた時の感激を、記している。
- 12 Chalmel, L., *Le Pasteur Oberlin*, Paris, 1999. p.56.  
Chalmel, L., *Oberlin:Le pasteur des Lumières*, Strasbourg, 2006. p.20.  
この個所は1820年7月15日の *Annales de Ban de la Roche* (パン・ドゥ・ラ・ロッシュ日誌)より、同じ引用は、カーツの前掲書、11ページにも記載されている。
- 13 Op.cit.,p.17.
- 14 Op.cit.,p.19. シャルメルはここで先のオベリンの大学時代の修得教科について、非常に複専攻的 pluridisciplinaire と表現している。
- 15 Ariès, Ph., *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris, 1973. pp.318-351.  
アリエスは上記のページにおいて「小さな学校」petites écoles について1章を割いている。
- 16 Avazini, G., ed., *Dictionnaire historique de l'éducation chrétienne d'expression française*, Paris, 2001. pp.316-318.
- 17 Op.cit.,pp.105-108.
- 18 Op.cit.,p.77.
- 19 Op.cit.,pp.106-107.  
実際このシャルメルの著作にみるように、オベリンは教区の学校のテキストとしてコメニウスの『世界図絵』*Orbis sensualium pictus* を採用していた。
- 20 梅根悟監修『世界教育史大系 32 技術教育史』、講談社、1978年。256ページ。  
以下、オベリンの時代の職業教育に関しては同書を参照。
- 21 Op.cit., pp.316-318.  
このラ・サールのサン・シュルピスとサン・ヨンにおける技術教育については前掲書269ページにも言及されている。
- 22 ポワル・ア・トリコテでは、その正式名称「編み物学校」*écoles à tricoter* が示すように知識的教科とともに「編み物」を教えていた。
- 23 ドイツの学校教育概観に関してはペーター・レントグリーン/望田幸男監訳『ドイツ学校社会史概説』晃洋書房、1995年 (Peter Lundgreen, *Sozialgeschichte der deutschen schule im Überblick Teil I, II*, Göttingen, 1980/1981) 参照。
- 24 前掲書、312-315ページ。  
以下、ドイツにおける職業に関しても同書を参照。
- 25 前掲書、313ページ。
- 26 池端次郎監修『西洋教育史』、福村出版、1994年。110-111ページ。
- 27 中世の自由学芸に関しては以下の文献を参照。  
Riché, P., *Ecoles et enseignement dans le Haut Moyen Age; Fin du Ve siècle-milieu du XIe siècle*, Paris, 1979.
- 28 梅根悟監修『世界教育史体系 24 中等教育 I』講談社、1975年。105-106ページ。
- 29 前掲書、102-103ページ。「神学級」に関する記述部分の引用。
- 30 前掲書、75-78ページ。
- 31 前掲書、98-100ページ。
- 32 これらのコレクションは Musée J.-F. Oberlin に展示・所蔵。

## 参考文献

### J.F. オベリン

Chalmel, L., *Le Pasteur Oberlin*, Paris, 1999.

Chalmel, L., *Oberlin:Le pasteur des Lumières*, Strasbourg, 2006.



Kurz, J. W., *John Frederic Oberlin*, Colorado, 1976. (邦訳：ジョン・W・カーツ / 柳原鐵太郎訳『ジャン＝フレデリック・オベリンーアルザスの土を耕し心を育んだ生涯』桜美林学園、2006年)  
Leenhardt, C., *La Vie de J.-F. Oberlin*, Toulouse, 1914.  
Psczolla, E., *Jean Frédéric Oberlin*, Strasbourg, 1985.

#### アルザスとバン・ドウ・ラ・ロッシュ

Hoffet, F., *Psychanalyse de l'Alsace*, Paris, 1951. (邦訳：フレデリック・オッフエ / 宇京頼三訳『アルザス文化論』みすず書房、1987年)  
Leypold, D., *Le Ban de la Roche: au temps des seigneurs de Rathsamhausen et de Veldenz*, Strasbourg, 1989.  
市村卓彦『アルザス文化史』人文書院、2000年

#### 教育史

Ariès, Ph., *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris, 1973.  
Riche, P., *Ecoles et enseignement dans le Haut Moyen Age; Fin du Ve siècle-milieu du XI<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1979.  
Baum, J. W., *Johan Georg STUBER*, Strasbourg, 1998.  
Avazini, G., ed., *Dictionnaire historique de l'éducation chrétienne d'expression française*, Paris, 2001.  
De Maurepas, A., Brayard, F., *Les Français vus par Eux-même : Le XVIII<sup>e</sup> Siècle*, Paris, 1996.  
岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』知泉書館、2007年  
梅根悟監修『世界教育史体系 24 中等教育 I』講談社、1975年  
梅根悟監修『世界教育史大系 32 技術教育史』講談社、1978年  
池端次郎監修『西洋教育史』福村出版、1994年  
コメニウス / 鈴木秀勇訳『大教授学 1』明治図書、1962年  
コメニウス / 鈴木秀勇訳『大教授学 2』明治図書、1976年  
井口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年  
J. A. コメニウス / 井口淳三訳『世界図絵』平凡社、1995年、1983年  
フィリップ・アリエス / 中内敏夫、森田伸子訳『〈教育〉の誕生』新評論  
ペーター・ルントグレーン / 望田幸男監訳『ドイツ学校社会史概説』晃洋書房、1995年  
M. クラウル / 望田幸男訳『ドイツ・ギムナジウム 200年史』ミネルヴァ書房、1986年